残したい想いと風景

朝日地域

青屋獅子と乘鞍登山道

Aoyajishi to Norikuratozandou

語り手　上牧忠敏
聞き手　山本真紀
企画　高山市
取材日：令和5年11月28日

上牧 忠敏
昭和16年1月10日生

プロフィール

朝日町青屋生まれ。
朝日中学校、高山高校朝日分校定時制を卒業。
家業の大工に従事しながら青屋獅子と乘鞍登山道を守る。

青屋獅子との関わり

昭和16年１月10日生まれの巳年で、現在は、82 歳です。朝日の青屋に、３人兄弟の長男として生まれました。朝日中学校を卒業した後、高山高校の朝日分校へ通いました。定時制です。親父が大工だったもんですから「こりゃ、後継ぎしんとあかん」ってことで、昼間、仕事をして、夜間学校に通ったんです。夏場は、ずっと自転車で通えたんですけども、雪が降ると全然、自転車にも乗れんし、冬の間は、ずっと４キロを歩いて通いました。そして、親父の見習いに入って大工を習いながら、４年間、学校へ通ってなんとか卒業できました。

青屋祭りは、秋の祭りで、昔は、9月の11日頃にやっとったんです。そして、昔は祭りがあると、「おもちゃ屋」って店がちゃんと来ました。そこにおもちゃを買いに行くと、獅子笛が鳴り出す。そうすると、なんか、みんなそっちに興味があるのか知らんが、すぐに獅子笛の方へ走って行った記憶があります。子どもの時は知らずに、後から聞いたんですけど、親父の兄弟が男ばっかり６人いて、そのうち２人の叔父が獅子舞をしておったそうです。そういうこともあって、自分も獅子を習おうと思いました。

「青屋獅子」は、伊勢神楽獅子で、女獅子っても言われておるんです。私の師匠からは、久々野町の反保（たんぼ）って所から習ってきたと聞いております。私が習い始めたのは、小学校４年生の 10 歳頃です。その頃、私より２つ上の先輩と２人で習いましたが、中学でその人が高山へ行ったもんですから、あとは自分ひとりになりました。

青屋獅子の舞い方

師匠は、黒林兼太郎って人。「青屋獅子」は、「半四郎獅子」「新牧（しんまき）獅子」がありまして、黒林師匠は、「新牧獅子」の方。そして、「新牧獅子」の踊りの方がどっちかっていうとごつく、「半四郎獅子」は優しかったと聞いております。私は、ごつい方の「新牧獅子」で習いましたが、私の踊りは、しなやかでやわらかいぞって言われていました。

私が習い始めた頃、黒林師匠は、62歳頃やったかな。ちょっと小柄な方でしたが、必ず洋服でなしに着物を着てみえたんです。ちょび髭を生やしてみえましたね。そして、怖い存在でした。だから、うちのおふくろに「師匠は、先生よりこわいぞ」って話したことがあったな。昔は、部屋を仕切ってなかったもんで、どえらいでかい所で、薄縁（うすべり）が板の間の所に敷いてあって、その上に座布団が敷いてありました。そこへ行ったら、必ずおつくばり。師匠が「そしゃ、おみたち、ちょっとやろうか」って髭を触って言われると、私は、ドキッとして緊張しながら習っていました。

「青屋獅子」は平成５年に、朝日村の無形民俗文化財に、指定されておったんでないかな。「青屋獅子」がいつから伝わったってことは、聞いておらんのやけど150年くらいは、経っておると思います。始まったきっかけもちょっとわからんけど、

朝日地域

青屋獅子と乗鞍登山道

Aoyajishi to Norikuratozandou

神代踊りは、久々野の柳島から。すべて久々野からです。久々野の小屋名にも女獅子があったんですけど、後継者がおらずに、辞めてまっとるみたいやな。

曲目は、「剣の舞」「短い幕切り」「長い幕切り」「鈴の舞」「段獅子」「洞入り」の６曲。最初に舞うのは「剣の舞」です。これは、悪魔祓いっていうんですけど、刀で舞うんです。私は「鈴の舞」を習いました。右手に鈴、左手に梵天を持って踊ります。「鈴の舞」は、だいたい10分ですが、女形で踊るので、中腰で内股で女装して舞う。私の舞った頃は、黒留袖を着て踊ったんですけど。本当にえらい。大変ですよ。「段獅子」っていうのは、獅子頭を両手で持って舞うやつ。あじかを持って練習しましたな。「段獅子」は、獅子が芋掘りをする舞なんですよ。そして、「洞入り」って舞は、穴の中に獅子が入っておって、獅子が日向に出て喜んで、へんべ（蛇）をとって食べたり、寝て、起きたら、自分の体の虱をとって食べるとこが舞になっとるの。これを時間かけて舞うと40分くらい。寝るところなんかもあるんで、そういう場面を入れるので長いんです。「洞入り」は、子ども達に最後まで教えるチャンスがなかったもんで、彼らが、青年になった時に教えたんです。そこで、また復活したんです。一通り、獅子を憶えてしまわんことには「洞入り」は、難しいんですよね。例祭の時は、地域を回らずに御旅所で舞って、神社に戻ります。それぞれの獅子が２人ずつおるもんで、一通り６つの舞をやると１時間ほどかかりますね。その他に「八百屋お七」って舞があるの。「おみたち、次の年は、今度、これを教えるぞ」って言ってみえた黒林師匠が亡くなられて、結局、習えなかったんです。

祭りに参加する上牧さんと地域の子ども達

青屋神明神社の祭り

他に「おかめひょっとこ踊り」っていうのもある。これは、神事が済んだら御旅所へ行って、その帰りにお酒を飲むもんですから、帰りに結構楽しくなった所で、神社から50メートルほどの家に潜んでおって、行列が来るとそこへ飛び出る。獅子とは別ですね。ひょっとこの青蔵は本当にだっしゃむない恰好。汚い恰好に着替えます。だっしゃむない恰好をしんならんで、やわいに時間がかかるんです。ほとんど引き裂けて継ぎがあったり、ねこだを背負って尻の辺まで下げてな。行列の先に出て、見物客にちょっかいを出しながら行くんです。

私の子どもは、たまたま女の子ばかり３人でしたもんで、一番下の子が、みんなに教えるのを際で見ておって、舞を覚えてまったの。それで、その子が稚児に出ておって、神事が終わった時に、祢宜さんに聞いたんです。「うちの子は女の子だけど、獅子舞をやりたいって言うんですけども、女の子が、獅子舞をやっていいんかな」って。「そりゃ、是非」ってことで、稚児をやっておったんですけど、「短い幕切り」を舞ったんです。それを宮司さんやみんなに喜んでもらったの。その子が、小学４年生くらいの時だったかな。その時、宮司さんと一緒に撮った写真が今でも神社に飾ってあります。

今年97歳になるうちの叔父さんが、一昨年まで宮司をやっておりました。青屋神明神社と他の神社を３つほど担当しておったんやけど「青屋の祭りは、本当、行列もいいし、獅子はもちろんのこと、神代踊り、鉦、そういうものが全てを丁寧にやっておる」って言われました。元々は、久々野から習ってきたんやけども、その通り丁寧にやっておる、本当に丁寧な祭りやって言われております。

祭りに参加する上牧さんと地域の子ども達

©2023高山市デジタルアーカイブ

朝日地域

青屋獅子と乗鞍登山道

Aoyajishi to Norikuratozandou

叔父さん達も獅子舞をやっておって、そして、うちの親父は、神事の方で、神楽の方をやっておったんです。私が獅子を習いかけた時に獅子の方へ来て、獅子笛をやるようになりました。こうやって、代々、獅子舞も伝承していったんやな。獅子舞や獅子笛の役が終わると、今度は、太鼓の方へ移らんならんのです。太鼓を叩きながら、歌を歌って舞わさせるっていう役ね。

コロナの前の年は、御旅所は人手不足で行かなんだけども、神社の広間で全部の獅子と神代踊り、鉦などをやったんです。昔は、夜祭りをやったんですよ。下青屋には、神社があるもんですから。神楽祭りは、上青屋の昔の大きな家で「獅子の宿」「鉦の宿」を毎年交代で担当しました。そこで、酒を飲んで、獅子を舞って、神代踊り、鉦の全てをやります。神社へ帰る時は、竿の先に提灯がついとる「高張（たかぼり）」を持って行列を作って、神社に入って行ったんです。そして本祭りでも、やっぱり、お客さんの接待して、それから祭りに行くもんですから、どんな早くても10時頃。それから夜祭りをして、終わるのが12時過ぎることもありました。自分達は、子どもやったもんで、酒飲みの相手を見とるだけで、つらかったです。

鈴の舞

青屋獅子のこれから

よく結婚式なんかに招待されていきました。伊勢神宮の式年遷宮祭、美濃加茂の日本昭和村（「ぎふ清流里山公園」に改称）がオープンした時の式典に招待されましたね。昔、ＮＨＫのお昼の番組で、名古屋に行って舞いましたが、その時は、父親が太鼓を叩いて、私が「鈴の舞」を舞いましたね。

今の若い衆は、後継者どころか、本当に祭りなんかやりたくない者ばっかりかもな。旗なんかもやっと立てて、朝草（朝食前の早い時間にやる仕事）に行って、はや、その夕方には倒してしまう。そんな様（ざま）やもんで、後継は、はや、全然だめやと思います。コロナの影響が大きかったと思いますよ。とにかく後継者がおらんことが一番残念。獅子は、小学校４年生で習って、中学で終わりです。教えた子どもはそこで終わり。後継者として残っておるのは、私のような年代。子どもはそこで終わりなんです。たまたま長男で、家におってくれると、最後まで続くんですけど、もう全然子どもはおらんのです。今のコロナで４年間、祭りは全然できとりませんので、後継者育成なんてことは、全然やってない。それに第一、子どもがおらんのです。過疎化になって、青屋は下青屋と上青屋と別れておるんですけど、昔は両方合わせて、70軒から80軒あったのが、今は、34、5軒しかない。それで、子どもは、保育園に３人、小学校１人、合わせて４人。本当に、子どもがおらんのです。後継者育成なんてのは、全く無理です。子どもがおらんようになってまって、育成とか無理、全然、成り立たん。人足も全然おらん。これからは、例祭なんてことは、全く無理で、神事だけで済んでいくんじゃないかと思います。

©2023高山市デジタルアーカイブ

朝日地域

青屋獅子と乗鞍登山道

Aoyajishi to Norikuratozandou

乗鞍登山道の歴史

乗鞍登山道の入り口は、寺澤（てらざわ）にあります。昔の道は、みんな日当たりのいい日面を通ったんで、うちのたかにある６番目の地蔵さん以外は、全部、日面のところにあってこの旧道の道路側にないんです。

太郎之助おじいちゃんは、上牧家の三代目として安政６年に生まれました。幼くして、父親と別れて、母の手ひとつで育てられたってことです。12、3歳の頃から山稼ぎなどに出て、家計を支えたそうですが、何か手に職を付けんにゃってことで、大工を習って、22、3歳の時には、一人前として稼ぐようになりました。結婚されたのは、25歳の時です。

太郎之助おじいちゃんが、青屋から乗鞍登山道を作るという決意をしたのが明治28年頃。一人じゃとうてい無理なんで、友人の森畑久次さんと高原梅蔵さんに協力を呼び掛けたところ、「わりゃ、なに、そんな、たわけたようなことをこいて」「そんなもん、できるわけない」って、全然、相手にしてもらえず。しかし、信念と熱意を持ってなんとか協力してくれるように頼んで、何回となく、説得して、なんとか「よし、そうか」って返事をしてもらったそうです。

明治29年の夏、第一歩目の鎌が入りました。家から近いうちは、家から通って、笹刈りをしたんですけども、途中でだんだん遠くなるもんで、高根寄りの谷間（たにあい）に小屋を建て、そこへ寝泊りしながら笹を刈り続けました。長い時は、半月から20日くらいは、家へは帰らずに笹刈りに熱中しておったということです。それで、食料が足らんようになると、うちの親父が、米やら味噌をおねて、届けたって話を聞いております。２人の日当は、出したようです。

昔は、測量機なんてものはないでしょ。雪が積もると笹が全部寝てまう。そうすると、春先に雪が固まって、どこでも自由に歩き回れるでしょ。その時に木を削ったりなんかして、目印をつけておいて、雪解けになってから、それを印に笹を刈って行ったそうです。念願が叶って、千町ケ原に到着したのは、３年目の夏。そして、明治32年の夏には、頂上に立つことができ、明治33年の夏には、数十名のお客さんが登山道を登ってくれました。

上牧 太郎之助
（安政6（1859）年～昭和14（1939）年

登山道作りに協力した友人たちと

176体の石仏の設置

太郎之助おじいちゃん最愛の妻は、33歳で亡くなりました。その後、いろんな葛藤の中で、修験の道へ進まれたんやね。上麻生のお寺で願望にあたり、登山者の安全やら祈願のための石仏を安置しようと思ったそうです。寄付を募って、高山の石仏屋に石仏を作ってもらいました。安置が終わったのは、昭和８年。番号と住所と名前を刻みこんだ石仏は、美女峠から大八車で家まで、引いてきました。森畑久次さんと高原梅蔵さんはもちろんのこと、青屋の青年衆、時には登山者にもお願いして、石仏を運んでもらいました。石仏の数は、176体でした。

一時、営林署の材木出しをする林道ができて、通らんようになった区間の石仏をここの安置所へ下してきたんです。そしてまた、営林署の道が通れんようになったもんですから、また元の太郎之助の道が使われたんです。そうかって、一度下げた地蔵さんをまた持ち上げるなんてことは、なかなか大変なことやもんで、そのまま安置しとります。とにかく石仏をおねてくるのが大変で、よう、石仏をおねて

登山道に安置された石仏

©2023高山市デジタルアーカイブ

上がれたなと感心です。

実際に登山道を見てみると、測量機もない時代に、ようこんなところに道が作れたと思って不思議に思います。感心しますな。

「88作戦」

自分の背丈より高い笹藪(やぶ)を役場の人達と11名で上がったことがあります。その時は、私が一番後ろを歩いておったんですけど、足で何か固いものを踏んだなって感じがしました。石の角っこがちょっと地面に出ておったんですよ。それを掘り返してみたら、なんと石仏だった。朝日村の時代に「88作戦」という名を付けた企画で、何回も石仏を探しに行きました。最後の「88作戦」の時に、4体の石仏を発見しました。やっぱり、これも太郎之助おじいちゃんのお導きなんじゃないかなって思いますね。

一番最初に見つけた石仏は、19番の石仏でした。見つけた私と叔父さんのことが、新聞記事に掲載されました。この時は、調査中に発見したんです。1カ所に２体ずつ、全部で176体の地蔵さんがあります。現在、安置してある石仏が44体かな。「88作戦」で見つかったのは、その場所に置いてますからね。昭和34年だったかな、伊勢湾台風のあった時。倒木がすごかった時。元々、石仏を大きい木の根っこに据えるってことも結構あったもんで、この時に、土に埋もれてしまった石仏も結構あったと思うんです。

登山道のこれから

青屋の登山道は、尾根ばっかり通らんならん、急な道なんですよ。青屋から上がると、えらいもんでね。今は、畳平までバスで行って下りてくるとかできるしね。しかし、せっかく太郎之助おじいちゃんが、苦労して作った登山道ですから、末永く、通れたらいいと思うんですけどね。すぐに笹が生えてくるもんですから、下刈りするのも大変です。なんとか市なんかの助成とかあるといいなと思います。登山道は、20キロほどありますからね。朝日村の時代は、商工会の青年部が、刈ってくれたこともあったんですけど、そう長く続くもんじゃないね。その次は、森林組合が、笹殺しの農薬を撒いてくれたもんで、今のところはなんとか通れるようになってますけど。

太郎之助おじいちゃんは、上牧家の３代目。私は、６代目なんです。そりゃ、登山道を代々、うちが守っていければ一番ありがたいですけど。私の子どもは、女の子ばっかりやもんで婿養子をもらっておりますが、男系っていうものがなくなっていくもんでな。とにかく、地蔵さんだけは、守ってもらいたいってことは、伝えておるけども、到底、そんなに期待はできんと思っております。これからは、市の方などに寄り添いながら、末(すえ)は、守っていってもらわんとならんのかなって思っとるんです。

地蔵堂に安置された石仏

©2023高山市デジタルアーカイブ